

---

# 鏡の国戦記 ~ EPISODE SHAMAI ・ 4 ~ 『ディアブロ・デ・シャマイ』

亜玲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鏡の国戦記（EPISODE SHAMAI・4）『ディアブロ・デ・シャマイ』<sup>『</sup>

### 【Nコード】

N3231D

### 【作者名】

亜玲

### 【あらすじ】

EPISODE MIRAIの13年前　のちにシャマイ1のプレイボーイ、シャマイ1の弓使い、と数々の名で謳われることになる8歳の少年アツカと、彼の大切な人たちが繰り広げる小さな冒険物語。

## 第1話

±第一話±

「やゝい！ 病弱ゝ！！！」

「地鼠も捕まえないもんなゝお前なら！」

「そんなんじゃモランになんかなねーやい！！！」

生まれ付き、体が丈夫な方ではなかった。

医師である父にも完全には治せず、しょっちゅう気管支を患っていたし、どんなに鍛練しようと思っても体力は続かず、体付きも貧弱だった。

「おれは……」

アッタカ・マウアは、そんな自分が大嫌いだった。

13年前、ある日。

「アッタカ、朝ですよ！」

昨晩からまた体調を崩し臥せていたアッタカの耳に、優しい声が届く。

「……う……もう朝……？」

窓にかかった簾の間から差し込む柔らかな光に、アッタカは目をし

よぼしよぼさせる。

「具合はどう、アッタカ？」

心配そうに部屋に入ってきたのは、2才年上の姉、アツキナだ。その手には薬の乗ったお盆を抱えている。

アッタカの父は医師で、母もその手伝いをしており仕事が忙しく、二人ともほとんど家にいない。だからアッタカと弟アツキにとっては、アツキナが母親のようなものだった。

4

「おはよう、姉さま……ぐあいはいもついいよ」

ぐっすり眠ったおかげで、昨日よりはだいぶん体が軽い。

「そう？ アッタカはすぐ無理するんだから……はい、これお薬。」

差し出された薬を一息に飲み干す。

「ふえ……にが……」

「これくらい我慢しないと。男の子でしょ!」

陽気にそう言つと、アツキナは簾を巻き上げた。

「ほらアツタカみてみなさい、今日はすごくいい天気!」

「ほんとだ……」

雲一つない青空が眩しい。

「そつだ、たまにはお外に遊びにいきましょう! 気分転換にもな

るし、良いと思わない？ アツツキとあなたと私で！」

名案、とばかりに手を打ち、うれしそうに提案する姉。しかし……

「いやだ……」

外に出れば、また皆にからかわれるに決まってる。

いつもそうだった。

一緒に狩り遊びに行っても体力のないアツタカは皆についていけず、お荷物扱いされた。

ムラナツカ塾（シャマイの学校だ）では、心ない子供たちにずる休みなんじゃないかと陰口をたたかれているのも知っている。

クホには、体の弱い自分はシャマイ失格だとまで言われたこともある。

そうやって言われ続けて、卑屈になって……いつしかアツタカはすくなくキレル軽い二重人格の子供になっていた。

だから、極力人とは会いたくない。ひどい事を言われるのも嫌だし、何よりキレてしまう自分が……

鬱々と押し黙ったアツタカが、ふと頭にぬくもりを感じた瞬間。

「ぎゃあああつ!!! いてえええええええつ!!!」

「てめえあたしのナイスアイデアが気に食わないとでもゆーのか、あ〜ん?!」

先程までの穏やかさはどこへやら、弟の頭を絞り潰さんばかりに握りしめたアツキナが、地獄の底から響くような声を出す。

「いえ!! まったく!! 全然さんせいっす!!」

「そおだよな?! 行くよなあ、ああ?!」

「はいいいい!!...!!」

ほとんど悲鳴に近いような声でがくがくと頷くアツタ力。

するとそれを見て満足したのか、アツキナは弟の頭から手を放し、にっこり笑った。

「ふふつ、そうよね、外の空気を吸えばきつと元気になるわよね! じゃあ、はやく支度なさい 私はアツキをつれてくるわ!」

「.....」

ずきずきと痛む頭を抑え、アツタカはただただ頷いた。

「続く」

## 第2話

±第二話±

「兄しゃま！ あそぼあそぼ！！」

「うん、わかったから！」

「ふふ、仲良しね！」

まだ5才のアツツキに手をひかれ、アツタカとアツキナは村の小さな広場に来ていた。

「すなあしよびしよ！」

無邪気に指差すアツツキの視線の先には、これまた小さな砂場がある。

しかし。

「あ……」

「兄さまー？」

砂場には、アツタカが一番キラいなやつが、自分たちとともに陣取っていた。

子供ながらに端正な顔。

どちらかと言えば小柄な体をつつむ、青チエツク。

「クホ……」

青派リーダーの家系・スラム家の長男クホは、何かとアツタカにつ  
つかり、病弱なことをネタにしてはとりまきとともにアツタカを  
集中攻撃して楽しんでた。

「アツタカ……大丈夫？ 私が追い払ってあげるわよ？」

あからさまにげんなりした顔をする弟に、アツキナが心配気に囁く。

「……いせ」

しかし、姉の申し出に、アツタカはゆるゆると首を振った。

いつまでも姉に頼っているわけにはいかない。自分だって、モラン  
なのだから。

「俺が、おっぱらっつ」

「ア、アツタカ?!」

アツキナの呼び掛けには答えず、アツツキの頭を一撫ですると、アツタカは大股に砂場へと歩きだした。

「あ！ アツタカだ!!」

クホの腰巾着その1が、アツタカが歩み寄ってくるのを見てわざとらしく声をあげた。

「うわっ、何しに来たんだよー」

「やめるよなー病気うつる!」

いつも通りの腰巾着たちの罵声に内心沸々と怒りながらも、アツタ力はクホを真つすぐみつめた。

「なあ、この砂場、お前たちだけのじゃないんだ。ちょっと場所をあけてよ」

怒りとほんの少しの怖さに震える声を絞りだす。

「…なに、お前、ここで遊びたいの？」

しかしクホはそれに気付いていないのか、いつもどおり情を感じさせない、しかしやけに芝居がかった声で答える。

「だ、だったら何？」

「ゆずってほしいんなら、俺と勝負しよーよ。モランなんだから、ほしいものは力づくで手に入れなきゃさー」

それを聞いた腰巾着たちは、いやな笑い声をあげてはやしたてる。

クホは確かにむかつくガキだが、その実力は長老たちも一目置くほどだ。

腰巾着にすら勝ったことのない自分が、その親玉に勝てるわけがない。

「いいぞーやれやれー！」

「クホくんは勝てるわけねーよ病弱!！」

でも。

「……おい、今何ていった？」

「うわっ！ 出た!! 最後の悪あがき!！」

「ブラックアッタカだー!!」

喧嘩に負けるたびに悲しそうな顔をする姉。

擦り傷だらけの自分を心配してくれる弟。

「ぎゃははは！　じょうとーじゃねーか！　受けてたつぜー!!」

こいつに勝てば、俺は強くなれる。

家族を心配させない、強いモランに

「だははは！ だっせー！！」

「口だけかよ！！」

「クホくんさいきょー！！」

結果は惨敗だった。

「まあまあ、負けたヤツをののしるもんじゃないぜ。こいつもこいつなりに力をつくしたんだ……けいいははらえ、モランなら」

「……………つくしよお……………」

クホの大きな台詞に怒る気力も体力も、もう残っていない。

「おいアツタカ！　これでわかっただろ！　クホくんがちゅーせー  
をちかえよ！！」

「……………つ……………」

後ろの方から、姉と弟の視線を感じる。

俺はまた……………

「ううああああー！」

その時、どこからともなくどこか間の抜けた声が響いてきた。

ついでに、ドタドタと走る足音も。

「あ！ やっべニシニだー！」

「クホくん、逃げようぜー！」

「ふん、ニシニか……」

残念そうにアツタカを一瞥すると、クホー味はさつさと公園をあとにした。

「続く」

### 第3話

±第二話±

「大丈夫かーアッタカー?!」

いつものんびりした声にわずかな焦りの色をにじませながら、ニシニは地にひれ伏すアッタカの背を擦った。

「アッタカー!」

「兄しゃまあ!?!」

そして、はらはらと様子を見守っていた二人も急いで駆け寄ってくる。

「に、ニシニ……」

ニシニは、アツタカと同世代の赤派の子供たちの中でも、ずば抜けて高い能力を持っているアツタカの親友だ。

三人兄弟の長男で面倒見がよく、いつも笑顔を絶やさない優しい少年だが、本気で怒るとかなり怖い。青派の子供たちから最も恐れられている一人である。

「ニシニくん、ありがとう……あなたが来てくれて助かったわ」

アツタカの傷の具合を確かめながら、アツキナが申し訳なさそうに言う。

「たまたま通つたら、なんかけんかしてたみたいだったから来たんだぞー」

相変わらずの笑顔を浮かべるニシニを見ると、妙に安心する。

いつもそうだ。自分は姉や弟、そしてこの気の優しい友人に助けられてばかり……

「アツタカー？ どうか痛いのかあ？」

「やだ泣いてるの？」

気が付けば、大粒の涙がアツタカの頬を濡らす。

「ちがつ……あ、あせが目に入ったんだ！！」

そういいわけてゴシゴシと目をこするも、涙はとめどなくあふれ  
てくる。

申し訳なき、悔しさ、そしてなにより自分の情けなき……

「兄さま……」

「アツタカ……」

アツツキとアツキナが、アツタカを抱き締める。

「大丈夫、私があなただを助けてあげるわ。心配しないで……」

その日の午後。

ふて寝したアツタカと昼寝の時間になったアツツキを残し、アツキナはニシニをつれてある人物を探しに出かけた。

「アツキナ姉さん、だれさがしてるんだー？」

「そうねえ……私たちに協力してくれる人」

「きょーりよく？」

しばらく歩くと、先程とは反対方向の広場に人影がいくつか見えてきた。

「だーからーあんたくれー足速い人じゃねーと楽しくないんだってー!」

「るせえなっ！ 誰がそんなガキの遊びなんかするかよっ?!」

「あんだだっでガキのくせにー」

「くしえにー」

その光景を見て、アツキナはにっこりほほえんだ。

「あら、しかもさらに強力な助っ人達までそろってるわ」

「すけつと？」

アツキナはニシニとともに、ちびっ子たちに囲まれてキレかけているひょろりとした少年に歩み寄った。

「チダユウ！」

「ああっ?! あ、なんだアツキナか」

チダユウ・キンビア シヤマイの子供たちのなかでもずば抜けた脚力を誇る一つ年上の少年は、うんざりした顔でアツキナを眺めた。

「ニシニまで連れて何の用だよ？ つかこいつらどーにかしてくれ」

こいつら、とチダユウが指し示すのは、子供ながらすでにシヤマイの未来を担うと期待されている仲良し3人組

「ア・ヤカ、レラツカ、それにタクも、こんにちは！」

「こんにちわーアツキナおねいちゃん」

「アツキナさんだー！ あ、ニシニもー！」

「ちわっ」

レラツカと、その幼なじみタクは、今年で4歳になるア・ヤカを妹のようにかわいがっている。

「おー！ ちわー！ 何してんだー？」

笑顔で尋ねるニシニに、ア・ヤカが答える。

「あにょねーおにじっしー！」

「ああ、だからあなたが呼ばれたのね」

シヤマイ1の俊足が鬼になれば、そりゃ楽しいだろう。

「ったく……で、お前は何か用事か？」

「あのね、あなたに……いえ、あなたたちをお願いがあるの」

「お願い？」

三人組とチダユウ、ニシニは、揃って首を傾げた。

「続く」

## 第4話

### ±第四話±

「いつて……」

夕方、アツタカは隣で眠る弟に思いつきり腹を蹴られて目を覚ました。

「ばかアツツキ……」

弟の寝相の悪さは天下一品だ。

部屋の窓からは燃えるような夕陽が差し込み、家々で夕飯の準備をする楽しい音が遠くの方で聞こえる。

「姉さまー」

微妙にお腹の減ってきたアツタカは、姉を探して家のなかを見回す。

「……買い物かな？」

そう呟いた瞬間。

「アツタカアアアア！……！」

親友の叫び声がこだました。

「ニシニ?! どーしたんだよっ?!」

玄関の扉をあけると、珍しいことになり焦った顔をしたニシニが息を切らしていた。

「アツキナねーさんが……ねーさんが大変なんだー!!」

「なにいつ?!」

ニシニに連れられて広場に向かったアツタカは、その光景に愕然とした。

「アツタカー助けてー!!!」

姉が、羽交い締めになされている。

しかもそいつは、

「な、何者だおまえ?!」

「あー……えーっと……」

「（モラアフロースよ!）」

「あ、ああ、モラアフロースだ」

虹色のアフロヘアに仮面、という出で立ちだった。

アツキナを羽交い締めに行っている痩せた少年だけでなく、その後ろに仁王立ちしている三人の子供たちも同じ格好だ。

「もらふ……？　おい、ニシニ、聞いたことあるか?!」

「あるぞーえつと……シャマイでもさいきょーのじつりよくをも……つ……えーと、悪いやつらだ！　子供だからってあな……あな……ど？　っちゃんいけななんだぞー！」

所々首を傾げながらの親友の説明に、アツタカは顔色を変える。

「なっ……そんなやつらがいたなんて……!!」

「助けてー！！！！！」

姉の悲痛な声に、アツタカは必死で声を絞りだす。

「おいアフロ！ 姉さまをはなせ！！！」

すると、後ろに控えていた三人が前に出てくる。

「えーはなせって言われてだれがはなすかってのー！」

「てのー！」

どつやら左二人は女の子のようだ。肩をいからせ、あざけるように声を張り上げる。

「大変だぞアッタカー！ このままじゃアツキナ姉さんがさらわれ  
れ……さらわれてしまうー！」

「なっ……ちくしょおっ……！」

アッタカは、一番小さなアフロに飛び掛かり、

「どおっ……！」

「しはあっ……！」

もう一人のアフロ少年に思いっきり突き飛ばされた。

「アツタカ!!!」

細いアツタカの体が、軽がると吹っ飛ぶ。

「ぶはははは!!」

突き飛ばした方の少年は、両足を開き腰に手をあて、高らかに笑った。

「俺たちモラアフローズにおまえなんかかなうかな?!」

「くっ……」

見た目自分と同じくらいの年ごろなのに、このアフロはやたらと腕力がある。

「(ほら、そろそろ退場よ!)(」

「あ？ ああ……えーまああれだ、おまえの姉貴はいただいた。かえしてほしけりや俺たちのアジトまでくるんだな」

細い少年はそう言うと、一番小さなアフロをだきあげ、次に小さいアフロを背負い、アツキナとまだぶははと笑っている少年の腕をつかんで物凄い勢いで走り去った。

「ま、待てー！ー！！」

「姉さま……ちくしょおっ！ー！！」

あっさりと姉を連れ去られてしまったアツタカは、自らのこぶしを地面に叩きつけた。

悔しくて仕方がない。

「まただ……また俺はっ……！！」

自分の弱さのせいで、とうとう最悪の事態を招いてしまった。

大切な姉がさらわれるのを、手をこまねいて見ていることしかできなかつた……

「アツタカ……ん？」

そんな友を見つめていたニシニが、何かに気づいたように、先程までモラアフローズが立っていた場所に駆け寄る。

「おいアツタカー！　こんなものがー！！」

戻ってきたニシニの手には、小さな紙片が握られている。

「え………？」

その紙には、アジトの地図とともにこう書かれていた。

『ここが俺たちのアジトだ。

強い悪者がいっぱいいる。

姉貴を返してほしいなら、明日の昼までにこのりんを返して。

あと、このことを他のやつに言ったら姉貴の命はないと思え』

「続く」

## 第5話

±第五話±

「で、ここかよアジトって……」

痩せたアフロ少年      チダユウは、アツキナが提案した場所を見て  
うんざりと呟いた。

「なんかもんくあるのかよっ！ 俺たちのひみつきちだぜ?!」

そんなチダユウを睨み付け、タクが自慢気に説明する。

「秘密基地ねえ……」

モラアフロースがアジトに選んだのは、普段からタク、レラツカ、ア・ヤカの三人が遊んでいる、いわゆる秘密基地だ。

ヴァナーシャ特有の低木の木陰に草を敷き、小さなスペースが作られている。

「アタシらのきちになんかけち付ける気ー？」

「けちけちー！」

「いや……もういわ、疲れた」

噓し立てる二人の少女に軽い頭痛を覚えながら、チダユウはアツキナの隣に腰をおろした。

「こんなこと考えるお前もお前だけどさ、気付かねー弟も弟だな」

「あら、そこがかわいいんじゃない!」

アツキナは器用に自分の体に縄を巻き付けながらほほえんだ。

「ほんとだね、今のまま、可愛くてちょっと臆病なままでいてほしいわ。でも、それじゃダメなのよね……」

「ふーん……弟思いなこつて」

暗やみの中きゃいきゃいとままごとを始めだしたチビーズを眺め、チダユウは  
「くちゅっ!」とくしゃみをした。

もう太陽はとっくに沈み、夜の風は少し冷たい。

「俺はもう寝る。寝ずの番なんてやってられっか」

そう言って基地の裏手に回ろうとしたチダユウの腕を、小さな手がつかむ。

「ちだゆうー！ あかちゃんやってー！！」

「はあ?!」

「ア・ヤカがおとーさんでータクちゃんがおかーさんでーレラツカがおねえちゃんだからーちだゆうがあかちゃんだよ！」

「おい待て、俺がかーちゃん?!」

「チダユウはやくしてよねー！ アタシの弟やく！」

どうやらチビーズは、チダユウをままごとに参加させたいらしい。

「お、ま、え、ら〜！ だああれがやるかああ！！ アツキナに頼めアツキナに！！」

「だってアツキナさんもう寝てるぜ?」

タクの声に振り替えば、アツキナはすでに寝息をたてている。

「…………私が起きてるわ、って言ったのはどこのどいつだ…………」

このまま自分も寝てしまえば、チビーズが何をやらかすかわかったもんじゃない。

「あーわかったわかった！ やりゃあいんだろー!!」

半ばやけくそでチダユウがそう言うと、チビーズはにんまり笑った。

「よしよしチダユウちゃん、おかーさんがいい子いい子してあげるわよー!!」

「姉をつやまえよー」

「あかちゃんー！」

「うっせー！　つかタク！　気色悪い声だすなー！」

チダユウが叫んだその時。

「何やってるの？」

少年の声が、どこからか聞こえた。

「い、命はない、だと？！」

「ご丁寧にメモまで残していつてくれた悪者たちになんら疑問を感じることもなく、アツタカは真剣に焦っていた。

「ニシニ……行こうぜ！　いますぐ！　ただちに！！」

「さてよアツタカ」

自分肩をつかみ激しく揺さ振る友を、ニシニがたしなめる。

「てきはきょーりよくだぞー。このまま行ってもぼーぼーにされるぞー！」

「くっ……」

それに反論できない自分が悔しい。

「俺は、弱くねー」

「うん、知ってるぞー」

「でも、体力ないのはマジだ」

そればかりはどうにもならない。

病気がちなのは自分の責任ではなく、体が細いのもどうしようもない。

だが、自分には知恵がある。

「ニシニシ……俺は確かにやりはふりまわせねー。でも」

かつてシャマイーとうたわれたモランは数知れないが、その中には、アツタカのように体力のないモランもいた。そんな話を聞いたことがある。

彼が使っていた武器は

「ニシニ、木の枝をさがすの手伝ってくれ」

「おー。何するんだー？」

「……弓矢を作る」

「続く」

## 第6話

±第六話±

「たのしそうなことやってんじゃん。俺も混ぜてよ」

「なっ……クホ?! このガキいつからっ……」

低木の影から現われたのは、クホ・スマムだった。

「うげっ! クホだっ!! 何しにきたんだよー!!」

レラツカとア・ヤカを背中にかばい（しかしチダユウの前には出られない）、タクがクホを睨み付ける。

「ああやるーだー!」

「くほー!」

さすがのチビーズたちも、この怖い子供を前に焦っている。

「つめたいなあ。俺はなかまに入れてほしいだけなんだ」

しかしそんな彼らの様子を気にすることなく、クホは芝居がかった声でそう言つと、縄に自ら絡まって豪快に眠るアツキナにちらりと目をやった。

「ふーん……おもしろそうじゃん。しばったやつが勝ち？」

「違う、これは……！」

やや緊張を感じさせる声で説明しだしたチダユウの声が、止まった。

「クホくん、おれらによーじって何ー？」

「なんかまたおもしろい遊びかんがえついたのでー？」

なんとクホの背後から、腰巾着たちが3、4人姿を見せたのだ。

「い、何時の間に?!」

「なんか、しばって遊ぶらしい。ゆーかいごっこかな？」

しれっと言うクホの言葉を聞きながら、チダユウは頭を回転させた。

(俺はともかく、チビーズはシャマイの将来を担うやつらだ、こいつらにとっちやジャマにちがいないえ……こいつら連れて逃げてえとこだが、アツキナは一度寝るとちよつとやそつとじゃ起きねえ……寝てるやつをかつくとなると一苦労だし……俺だけ残って逃がすか？ でもこいつらにとって俺のひとじちの利用価値はねえし……っあーだからこんなやだっつったんだ!!)

思考をめぐらせている内に腹が立ってきたチダユウは、チビーズに

だけ聞こえる声でささやいた。

「（俺がこいつら足止めしとくから、おまえら死ぬ気で走れ。んで、アッタカとニシニに知らせてこい！）」

タクとレラツカが緊張した面持ちでうなづく。

「ア・ヤカ、こい」

タクは状況が今一つつかめていないア・ヤカを抱き上げ、なぜか赤面しつつレラツカの手を握ると、

「ぶははは！ あでいおーす！…！」

そう捨て台詞を残し、チダユウも驚くほどの速さでとつと逃げ出した。

「あ！ クホくんあいつら！！」

「俺たち、おいます！」

口々に叫びながら、腰巾着たちが前に走り出る　　が。

「させっか」

目にもとまらぬ速さで左右に走り出るチダユウのげんこつをくらい、あっけなく倒れる。

「いってー！ おとなげねーよー！」

「はやすぎっ！ー！」

「おまえらが弱すぎだろ……っ？！」

そんな腰巾着たちに呆れ果てていたチダユウの背に、何かかしがみ

ついた。

「逃げないの？」

「っ?! いつのまに……ぐっ!!」

普段はうざったいくらいの存在感を出しているくせに、いつのまにか気配を消して背後に忍び寄っていたクホの手刀を思いつきりぼんのくぼにくらい、チダユウはあっけなく倒れた。

「さ、さすがクホくん!」

「強いね!!」

「まあねー。……アツタカ、とか言ってたなあ……」

チダユウを縛りながら、クホが楽しそうにつぶやく。

「アッタカもニシニも……今のうちにつぶしと」

「アッタカーこんなんでどーだー？」

「ん、ちょうどいい」

村外れの林でさっそく枝拾いを行った二人は、ほどなくして弓矢を作るのにちょうどいい枝を発見した。

「作り方わかるのかー？」

「前に、ちっちゃいやつを作ったことあるからな」

昔の弓使いの話を知ったとき、すっかり憧れたアツタカは弓矢の作り方を年長者たちに聞いて回り、実際使える大きさより一回り小さいものを作ったのだ。

「すげーなー」

感心するニシニに少し照れながら、アツタカはその場にあぐらをかくと、腰に下げていた短い石刃を手にとり、木を削りはじめた。

「なあ、ニシニ……俺、あのアフローズにぜってー勝ちたい」

「おー」

「あいつらに勝てたら……俺は、きっと強く……や、ちげーな、じしん、が持てると思う」

「おー」

「んで、今度こそ、クホに勝つんだ」

「勝てるぞーお前なら！」

「ニシニ……」

ニシニを見れば、満面の笑顔を浮かべている。

「あ、ありがとな……」

照れとうれしさから、顔が少し赤くなる。

その時。

「兄しゃまー！！！！！」

「うがああああっ！！！！」

弟が、背後にアフロを引きつれて全速力でこちらに向かってきた。

「続く」

## 第7話

±第七話±

「あ、アツツキ!..!」

まさかアフローズに追われて……

「ん?」

だが、アフローズをよく見ると、その必死の形相にはどこか見覚えがある。

「びえええっ!..!..!」

「..!..!..!..!..!..!..!」

「ぶえええっ！！！！」

「あ……ア・ヤカにレラツカ……それにタクか?! 何してんだよ  
おまえら!!!!」

「あーばれちまったかー」

何が何だかわからず混乱するアツタカの隣で、ニシニがそう言う。

「ば、ばれたって……?」

「兄しゃま! たいへんたいへん!!! 姉しゃまがたいへん!!!  
」!

アフローズとアツツキとニシニのまとまりのない話を総合すると、つまりこういうことだ。

「姉さまは、俺に勇気をつけさせるために、お前らとチダユウさんにおねがいして、アフローズなんてくっだらねえあくやくになったふりして、俺をおびき出そうとしてたんだな？」

「うん……」

タクが涙を拭いながら頷く。

「んで、アジトで待ってたら、クホたちが来て、姉さまとチダユウさんがほんとにつかまっちゃまったってわけだ」

「うん……」

レラツカも涙を拭いながら頷く。

「なんで……なんでだまってたんだよニシニ！」

「ご、ごめんなーアツタカ……でもな、俺も、アツキナ姉さんも、お前に強くなつてほしかったんだ……だから……」

「……ごめん、もとはと言えば俺のせいだよな」

親友に八つ当たりしてしまったこと（とアフローズ相手に本気で悔しがつっていた自分）に恥じ入りながら、アツタカはうつむく。

「兄しゃま……姉しゃまにあいたいよお……」

ア・ヤカと肩をよせあって睨り泣いていたアツキが、涙声でつぶやく。

「姉さま……」

脳裏に浮かぶ、姉の笑顔。

いつも笑顔で優しい姉。

いつも弟たちのことを一番に考えてくれる姉。

「……行くろう、ニシニ。アツツキ、お前もだ」

作りたての弓矢を手に立ち上がったアツタカの瞳には、静かな闘志とシャマイの誇りが輝いている。

「か、勝てんのかよ……お前、俺にだって突き飛ばされてたんだぜ？」

未だ泣きじゃくるア・ヤカとレラツカの背をさすりながら、タクが怯えたような声を出す。

「かてるか、じゃねー。かたなきやいけねーんだよ」

「アツタカ……」

満面の笑顔を浮かべ、ニシニも立ち上がる。

「そーだな！ お前ならできるぞー！」

「兄しゃま！」

ニシニの言葉に頷き、駆け寄ってきたアツツキの頭を撫でると、アツタカはタクたちにむかって力強い声で告げた。

「お前は二人をおちつかせとけ。俺たちは行く。かならずもどってくるぜ……姉さまとチダユウさんを連れて！」

「おう！」

チビーズ三人を後に残し、アツタカ、ニシニ、そしてアツツキの小さな影は、みるみるうちに遠ざかっていった。

「……ふむ、少しは遅くなりましたね」

林の影でささやかれた声には、誰も気が付かなかった。

「……ゆ……チダユウ……」

「……ん……？」

何かが自分の腹をえぐる感触に、チダユウは目を覚ました。

「……いって！ 何ヒトの腹ふみつけてんだよっ？！」

「しーっ！ 静かに！！」

アツキナの長い足に蹴り付けられていた腹をさすりながら怒鳴る千ダユウに、アツキナは平然とした顔でそう忠告した。

「青派の子たち、今みんな寝てるから」

「マジかよ……やっぱりガキはガキだな……」

アツキナの言葉に後ろを振り向けば、青派の子供たちが身を寄せあって眠っている。

「ねえ、あなただけでも今のうちに逃げ出してくれない？」

「ばかかよお前……お前はともかく、俺は足まで縛られてんだぜ？  
にげれつかよ……」

チダユウの脚力を警戒したのか、クホはその足まで縄で縛り上げていた。

「なによ、走れないならウサギとびがあるじゃない……」

小声でつぶやかれた恐ろしい言葉をさらっと無視して、チダユウはアツキナに尋ねた。

「お前こそ、足自由なら逃げねーのかよ。お前が逃げれりゃ、こいつらも飽きてこんなくだらねーことおわらせるんじゃないの？」

「だめよ。あなた一人残して逃げたりしたらあなたの許婚に怒られちゃう」

「ばっ……何いってんだよ……」

実はチダユウには、生まれたときから定められた許婚がいる。アツキナならば親に決められた結婚などお断わりだが、彼ら二人は何気にかなり気があっているのだ、それはそれでいいのだろう。

「ま、それもあるけど……私がここで逃げちゃったら、アツタカはずっと強くなれないわ」

月に照らされるアツキナの横顔は、強さと優しさにあふれていた。

「アツタカはかならず私を助けにくる。そしてかならずクホたちに勝つわ」

「……そうか？」

「そうよ。そして、自信がつくの。あの子は弱くなんかないわ。ただ、自信がないだけなの。いじめられて、自信を奪われてしまって、本当の実力が出せてないだけなのよ……」

アツキナは月を仰いだ。

蒼くて、はかなくて、そのくせ強い光を放つ。

「アツタカみただわ」

「続く」

## 第8話

±第八話±

「はっ……はっ……」

「アツタカー大丈夫かー？」

「兄しゃまだいじょうぶ？」

月に照らされた獣道を、背に弓矢を負ったアツタカと、背にアツツキを負ったニシニは疾走していた。

最初はアツタカがアツツキを背負っていたのだが、息が切れてきたのを見兼ねたニシニが交替してくれたのだ。

「だ、いじょうぶ、だ……」

平然を装って答えるが、実際アツタカはかなり息苦しい状態にあっ  
た。

同年のニシニが、アツツキを背負っているにも関わらず息一つ乱  
していないのを見て取り、悔しさがこみあげる。

なぜ、自分はこんなに貧弱なのだろう……

「兄じゃまくるしそつ……」

「アツタカ、少し休むかー？」

気を遣ってくれる二人に、遣る瀬ない想いをひた隠して首を振る。

「いや、いい、んだ……早く行かなきゃ……ねえ、さまが……うっ  
！」

「アツタカ?!」

「兄じゃま!!」

いきなり体の奥底から不快感が沸き上がってきて、アツタカは体  
くの字に折り曲げて思いつきり咳き込んだ。

「大丈夫かー?! ゆっくり息すえー！」

ニシニが背中を撫でてくれて、少し落ち着く。

「ほ、ホツサ、だ……つくしよ……び、病気さえ、なけりや……」

咳き込みすぎて涙を流すアツタカを見つめ、ニシニが穏やかに言う。

「アツタカ……それは、よくないぞー」

「え……?」

口元を拭い、見上げた親友の顔は、いつも通り穏やかだった。

「おまえはいつも、びよーきのせいで、って言うよな。でも、それはだめだと思っただなあ。えっと……びよーきならびよーきなりに、強くなれるほーほーがあるはずだぞ、その弓矢みたいになー。おまえは、そんなくぶー、いっばいしたか?」

「あ……」

病弱なのは生れ付きだし、仕方がないとは思う。それでも、いつもこの体を恨んでいた。

こんな体に生まれたせいで、強くなれない。

こんな体に生まれたせいで、いじめられる。

でも、その解決策を、一度だって死ぬ気で考え行ったことがあっただろうか。

どうせムリだと、最初から諦めていなかっただろうか。

そしてそのくせ、弱いと言われてキレる自分　これじゃあ、嫌わ  
れていじめられて、当たり前だ……

「はっ……俺、かっこわりーな……」

この弓矢のように、少し頭をひねれば自分にあつた  
「強さへの道」があるはずなのだ。

「ありがとな、ニシニ……俺、まちがってた」

「おー！」

まだいまいち疑問符だらけの顔で頷く大切な親友に笑みかけ、アッ  
タ力はまっすぐに立ち上がった。

「俺は、弱くねー。バカだっただけだ」

自分にそう言い聞かせると、アツタカは唐突に走りだした。

「お、もついくのかー？ だいじょうぶかー？」

「だいじょうぶだー！」

まだ息は切れたままだけど、足もジンジンしているけど、

「兄しゃま、げんき！ かつこいいー！」

「よかったなーアツツキ！ お前の兄ちゃんはせかいいちいい男だぞー！」

「よせよっ」

今ならどこまででも、走っていけるような気がした。

「たーたたらりーハッハッホッ」

未だ夢の中の子分たちを置いて、クホは一人、低木のでっぺんによじ登り、小さな声で歌を口ずさんだ。

眼下に広がるヴァナーシャは月に照らされ、昼とは違う美しさを湛えている。

クホは、このヴァナーシャが大好きだった。

そして、この聖なる草原を神から授かったシャマイという人たちが本当に好きで、シャマイとして生まれたことを誇りに思う。

長老の屋敷に飾られたたくさんのライオンの毛皮を見て、偉大な先祖たちに想いを馳せるとき、自分にもその血が流れていることに歓喜する。

「たっていりほー」

だからこそ、スマム家が代々担ってきた青派リーダーと言う役目もまた誇りに思う。

赤派の連中は、シャマイのこの勇敢で猛々しい血を途絶えさせる気に違いない。

現に、最近のモランたちはどこか力に欠けている気がする。

アツタカのような者がモランになっては、シャマイの誇り高き歴史に傷が付く。

「つよいやつしかいない」

モランは、誇り高く、獰猛な、孤高の存在であるべきだ。

あんな中途半端な覚悟のものに権力を握られては、困るのだ。

「続く」

## 第9話

±第九話±

「あ、あれがアジト……」

走りに走ったアッタカたちは、やっとアフローズのアジト　チビ  
ーズの秘密基地　の手前まで辿り着いた。

「そっだぞー」

地図を確認しながら、ニシニも頷く。

視力7・0の瞳はすでに、縛られたまま座っている姉とチダユウを  
捉えていた。

「どおするアッタカー？」

「うーん……」

やはり、単純な殴り合いでは自分は彼らにはかなわない。頭を使わなければ。この弓矢を使って、何ができるだろう……。。

誇り高きシャマイのモランは、無用な殺生は絶対にしない。それは人間はもちろん、動物もだ。いかに相手が青派連中だとは言え、射殺すなどもつてのほか。

「どつすねば……」

「ぶーんぐるぐるー」

暇になったのか、ニシニの背中から降りたアツツキが、近くにあって長い蔓を手に遊びだす。

アッタカたちが身を隠している茂みから伸びる、長い蔓……

「……………それだ!!」

「おー？」

まるでヴァナーシャの神が味方してくれたかのように、突如アッタカの頭にアイディアが閃いた。

「アツツキ、そのつるかせ！」

「ふえ？」

半ば強引にアツツキの手中から蔓を奪いとり、アッタカはその長さ確かめる。

「よし、こんだけ長けりゃだいじょーぶだ！」

「何するんだー？」

不思議そうな友人に、アツタカは嬉々として説明した。

「この矢尻につるをつけてさ、あのアジトの木に向けて射るんだ！  
んで、あの木に矢が突きたつたら、俺がそのつるにつかまって、  
あの木の上にいるクホをけりおとす！」

「おおっ！　かつこいーなー！」

「それで、青派のやつらが混乱してる中につっこんでくの、ニシニ  
にまかせてーんだ。ニシニがあいつら追っ払ってる間に、俺が姉さ  
まとチダユウさんを助ける！」

「まかせとけー！」

親友が笑顔で頷くのを確認すると、アツタカはアツツキを片手に抱き、えっちらおっちら低木の上にのぼった。

「兄しゃま、おしっこしたいー」

「がまんしろ！」

軽くアツツキの頭をこぶくと、アツタカは蔓の片端を矢尻にしっかりと結び付け、もう一方の端をアツツキに巻き付けた。

「うごくなよ、アツツキ」

そして、深呼吸を2回。

背筋を伸ばし、弓に矢をつがえる。視界に、こちらに背を向けて座るクホをとらえる。

「ヴァナーシャのかみよ……」

小さな弓矢で幾度か練習したとはいえ、実践用サイズは初めてだ。

「……………ふっ！」

短い気合いの呼気とともに、蔓を結び付けた矢は一直線にアジトの低木へと飛翔した。

「……ん？」

何かが頭上を飛んだ気がして、チダユウは天を仰いだ。

そして。

「！」



「ぎゃああっ！」

「いてー！！！」

「クホくん?!」

クホが固まって眠る部下たちの上に落下し、

「たー！！！」

そのカオスの中に気の抜けた雄叫びをあげるニシニが突っ込み、

「姉さま！ チダユウさん!!!」

耳元で、自信に満ちあふれた少年の音が響いた。

「続く」

## 最終話

±最終話±

「だいじょうぶか?!」

手際よく縄をほどくアツタカに、先程までの余裕の態度を一変させ、アツキナが思いつきり抱きついた。

「アツタカあー！ 来てくれるって信じてたわ！！ 怖かったよお  
お……！」

「ねねねねえひゃま?!?!」

なぜか顔を赤らめるアツタカと、見事な演技を披露するアツキナを見て、チダユウはため息をついた。

(よくやるぜ……)

青派連中が寝ている間にアツキナから聞いたことだが、この『アツキナ改造計画』に青派を絡ませようとしたのはアツキナ自身だった。

この計画自体は大分前から練り上げていたようで、演技か本気が気付かないほどよくできている。

(それにしたって……)

自分はともかく、あのチビーズたちは随分怖い思いをしただろう。アツキナだって、肝心の弟だって、下手すれば大怪我を負っていたかもしれない。

「とんだブラコン悪魔だぜ……」

チダユウが呟いた時、背後から叫び声が聞こえた。

「アツタカ！ ふいうちなんてヒキヨーだぞ！ せいせいどうぞと勝負しろ病弱！！」

それは、珍しく演技がかつていない、子供らしいクホの声。

「……おい」

しかし、それを聞いて、アツキナの腕からやっと解放されたアツタカが声を震わせた。

「どうあああれがびよーじゃくじゃああああ……！」

「アツタカ?!」

アツタカはクホに駆け寄ると、両のこめかみにげんこつを当て、ぐりぐりしだした！

「びゃああああっ！！！！」

「ぎゃはははは！… ざまーみやがれ青ヤロー！！！！」

「……おい」

「なあに？」

「お前の弟……強くなったな」

「ええ」

泣きじゃくるクホと意地の悪い笑顔を浮かべるアツタカ、そしてそれを笑顔で眺めるアツキナに順に視線を移し、チダユウはもう一度、大きなため息をついた。

「覚えてるよ！」と定番の捨て台詞を残し青派の子供たちが走り去っていくのを仁王立ちで眺めていたアツタカが、いきなりがっくりと倒れた。

「あ、アツタカ?!」

近くにいたニシニが駆け寄れば、

「すー……」

「あら、寝ちゃったわね」

月明かりに照らされた弟の、少しだけ男らしくなった寝顔を見つめ、アツキナが満足そうに呟く。

「俺がせおってくぞー」

ニシニが、アツタカを抱えあげ、その背に背負う。

「あー疲れた……じゃ、かえるぞ」

チダユウがそい言って歩き出そうとした瞬間。

「君たち、ご苦労さまでした」

「どわあああっー!」

何も無い闇から、いきなり赤チエックづくめの女があらわれた。

「マママママンサマ?!」

焦るチダユウを完璧に無視さて、シヤマイ1腹黒い女宰相は、アツキナ達に歩みよった。

「ま、マヤン様……」

いつも余裕のアツキナとさすがのニシニも、珍しく冷や汗をかいて  
いるようだ。

「ふむ、私の提唱した作戦が功を奏してなにより」

「へ？」

チダユウが聞いたかぎりじゃ、アツキナがこの作戦を考えたはずだが……

「ま、ま、マヤン様のアドバイスのおかげです！」

「そついでしよつとも！」

アツキナの言葉に、マヤンが瞳を輝かせる。

「忘れないでください、アツタカくんは、『私の考えた作戦』で強くなれたんですからね」

「「はい……」「」」

チダユウも、アツキナも、ニシニも、ただただ頷くしかなかった。

(俺が甘かった……シャマイの悪魔は、この女だ……)

チダユウが仰いだ空には、満月が穏やかに輝いていた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3231d/>

---

鏡の国戦記～EPISODE SHAMAI・4～『ディアブロ・デ・シャマイ』

2010年10月9日17時37分発行